

ニュース JAFIC EYE №240

2021 年主要港における水揚動向

1. はじめに

本年のわが国における主要魚種の水揚動向を俯瞰するため、JAFIC が出張所や駐在所を置いている全国主要漁港のうち、釧路・石巻・銚子・境・松浦の各港について、農林水産省水産物流通調査の産地水産物月別調査に基づき、本年（10 月まで）の水揚動向を過去 5 年（2016～2020 年）と比較しながら検討した。

調査対象魚種を、以下のとおり 6 つのグループに分け、月別・年別の水揚量と年間の水揚金額を検討した。

- ①かつお・まぐろ類：カツオ、クロマグロ、ビンナガ、メバチ、キハダ、マカジキ、メカジキ
- ②いわし類：マイワシ、ウルメイワシ、カタクチイワシ
- ③あじ類：マアジ、ムロアジ
- ④さば類：さば類
- ⑤浮魚類：サンマ、ぶり類
- ⑥たら類：マダラ、スケトウダラ
- ⑦底魚類：ホッケ、かれい類、マダイ、ズワイガニ、たこ類
- ⑧いか類：スルメイカ、アカイカ

水揚量の集計にあたり、生鮮と冷凍は区別していない。

2. 釧路港

釧路港へは、道東海域で操業する夏～秋の大中型まき網漁業、秋～春の沖合底びき網漁業をはじめ、さんま棒受網漁業やいか釣り漁業、刺網漁業などが水揚げする。

本年の水揚量は 10 月末でいわし類（マイワシ）とたら

類（スケトウダラ）を中心に 19.0 万トン、金額は 78.8 億円である（図 1）。既に前年並みの水揚量に達しているが、11 月以降もスケトウダラやマイワシの水揚げが続いており、年間では 20 万トン前後に達すると見込まれる。水揚金額は 2017 年の 92.9 億円をピークに 80 億円前後で推移してきたが、本年も前年（82.3 億円）並みとなることが期待される。また、2016～2018 年には、一定程度さば類や浮魚類（サンマ）の水揚げがあったが、最近ではほぼマイワシとスケトウダラで占められている。

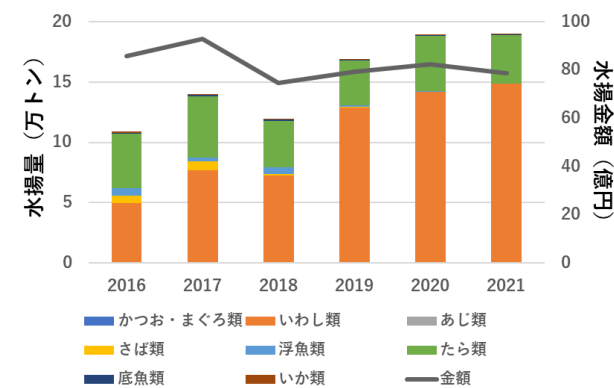


図 1. 釧路港における 2016～2021 年の主要魚種の水揚量と水揚金額の変化

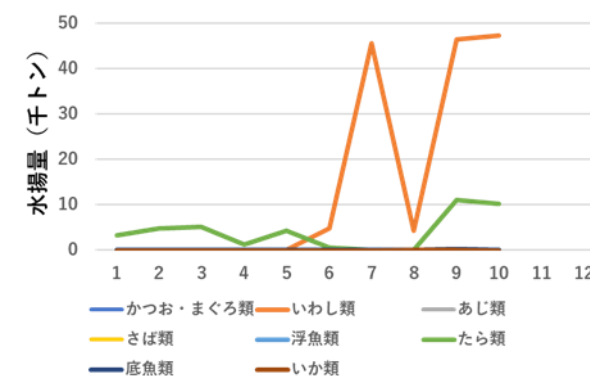


図 2. 2021 年の釧路港における魚種別月別水揚量の変化
本年の魚種別月別の水揚状況（図 2）をみると、8 月の

いわし類（マイワシ）の落込みが顕著であった。道東海域の記録的な高水温により、魚群が北方四島水域へ北上したためと思われる。また、かつては 10 月を中心にみられたさば類や浮魚類（サンマ）の水揚げも殆どみられなかった。

なお、集計には含まれていないが、近年はサケやシシャモなどの冷水性魚種が減少している。

3. 石巻港

石巻港へは、三陸海域で操業する沖合底びき網漁業や大中小型まき網漁業をはじめ、小型底びき網漁業や定置網漁業など沿岸域で操業する各種漁業が水揚げする。

本年の水揚量は 10 月末で 6.7 万トン、水揚金額は 65.2 億円である（図 3）。11 月に入りさば類をはじめとして 7 千トン以上が水揚げされており、年間では前年（8.6 万トン）並みに達するものと見込まれる。水揚金額は 2017 年の 114.9 億円をピークに減少傾向にある。本年は 10 月末時点で前年（92.5 億円）の 7 割にとどまっており、今後水揚量が増加しても前年には及ばないものと思われる。

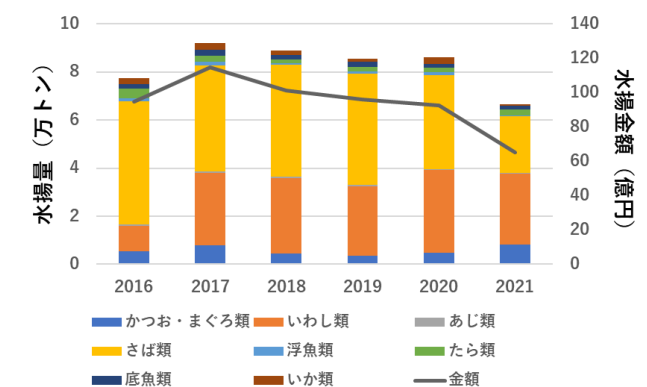


図 3. 石巻港における 2016～2021 年の主要魚種の水揚量と水揚金額の変化

いわし類（マイワシ）とさば類が水揚げの主体であるが、

かつお・まぐろ類（カツオ・ビンナガ）やたら類などの底魚類も水揚げされる。2017 年以降、マイワシが増加し年間 3 万トン前後を水揚げする一方、資源状況を反映して浮魚類（サンマ）、いか類（スルメイカ）、たら類（マダラ）の水揚げが減少している。

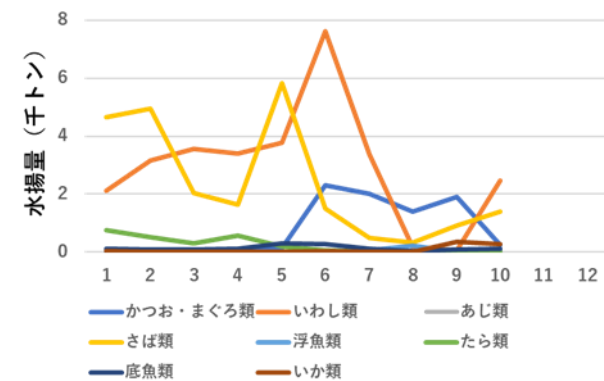


図 4. 2021 年の石巻港における魚種別月別水揚げ量の変化
 本年の魚種別月別の水揚げ状況（図 4）をみると、夏季にいわし類（マイワシ）とさば類の水揚げが大きく減少する一方、かつお・まぐろ類（カツオ）の水揚げが好調であった。資源の増加と水温上昇にともない魚群の北上が顕著になるとともに、今年のカツオの好調な来遊を反映したものと考えられる。なお、11 月に入りさば類が順調に水揚げされており、南下群を対象に三陸南部海域が秋の主漁場となっていることが示唆される。

また、集計には含まれないが、イカナゴなどの冷水性魚種の減少と、サワラ、タチウオ、ガザミなどの暖水性種の増加が顕著である。

4. 銚子港

銚子港へは、房総・常磐海域で操業する大中型及び中型まき網漁業や沖合底びき網漁業、さんま棒受網漁業に加え、はえ縄漁業や沿岸の釣り漁業などが水揚げする。

本年の水揚げ量は 10 月末で 24.3 万トン、水揚げ金額は 188.5 億円に達している（図 5）。年間の水揚げ量は概ね 26～27 万トンで推移しているが、2019 年以降いわし類（マイワシ）の水揚げが増加する一方、さば類が減少している。量は多くはないが、浮魚類（ぶり類）やかつお・まぐろ類も毎年水揚げされている。水揚げ金額は 2018 年の 253.5 億円をピークに次第に減少する傾向にある。本年も 10 月末時点で前年（239.8 億円）の 8 割弱に留まっており、年間を通じて前年を超えることは難しいと思われる。

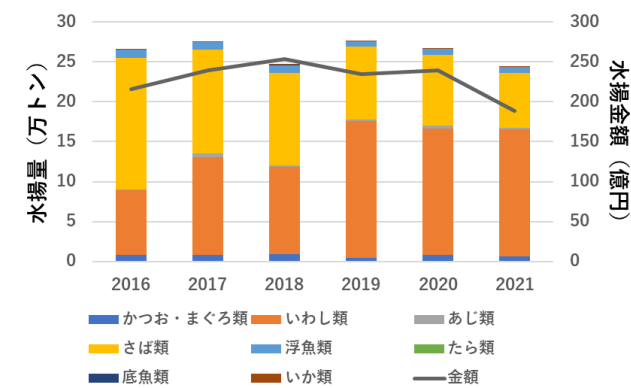


図 5. 銚子港における 2016～2021 年の主要魚種の水揚げ量と水揚げ金額の変化

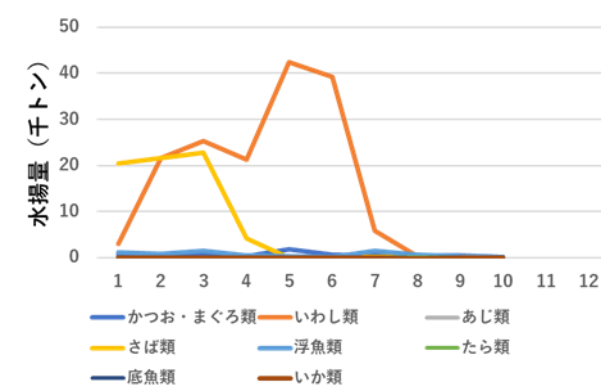


図 6. 2021 年の銚子港における魚種別月別水揚げ量の変化
 銚子港では、近年はいわし類（マイワシ）の水揚げが冬

～初夏に集中する一方、さば類は 11 月～翌年 2、3 月にかけて水揚げのピークを迎える。今年の水揚げ状況（図 6）も同様に推移しており、11 月に入り約 5 千トンのさば類が水揚げされている。また、かつお・まぐろ類や浮魚類（ぶり類）もほぼ周年にわたり水揚げされた。

5. 境港

境港へは、日本海西部で操業する大中型及び中型まき網漁業をはじめ、沖合底びき網漁業、いか釣り漁業やかに籠漁業などが水揚げする。

本年の水揚げ量は 10 月末で 7.4 万トン、水揚げ金額は 72.4 億円である（図 7）。11 月に入ってもさば類の水揚げが続くとともに浮魚類（ぶり類）の水揚げが増加しており、年間では前年（7.8 万トン）並みに達すると思われる。いわし類（マイワシ）、あじ類（マアジ）、さば類の増減にともない年間の水揚げ量が変動するが、最近ではさば類とあじ類（マアジ）の減少が顕著である。一方、浮魚類（ぶり類）が安定して水揚げされている他、かつお・まぐろ類（クロマグロ）の水揚げも続いている。

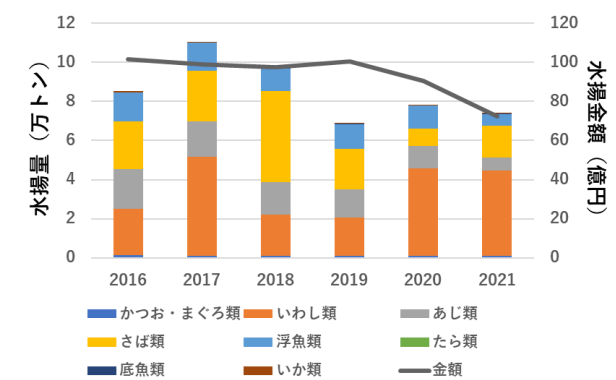


図 7. 境港における 2016～2021 年の主要魚種の水揚げ量と水揚げ金額の変化

近年の境港では、マイワシは、春・初夏・秋に水揚げの

ピークがあり、それぞれ体長（年齢）の異なる群が水揚げされる。一方、さば類は秋と冬に水揚げされる。また、初夏を中心にマアジやクロマグロが水揚げされ、秋から冬にかけてぶり類の水揚げが増加する。本年も、ほぼ同様のパターンを示したが、例年に比べてマアジの水揚げ量が少なかった（図 8）。

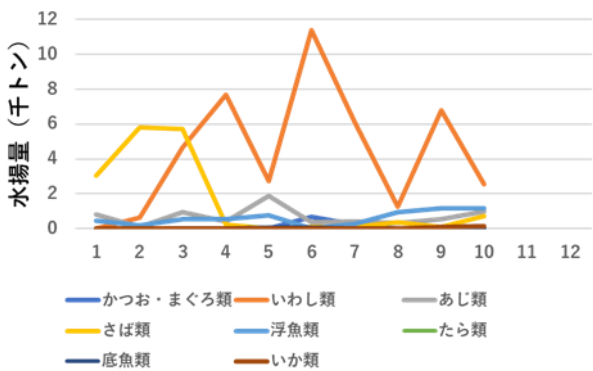


図 8. 2021 年の境港における魚種別月別水揚げ量の変化

6. 松浦港

松浦港へは、東シナ海で操業する大中型まき網漁業を中心に、中型まき網漁業やいか釣り漁業などが水揚げする。

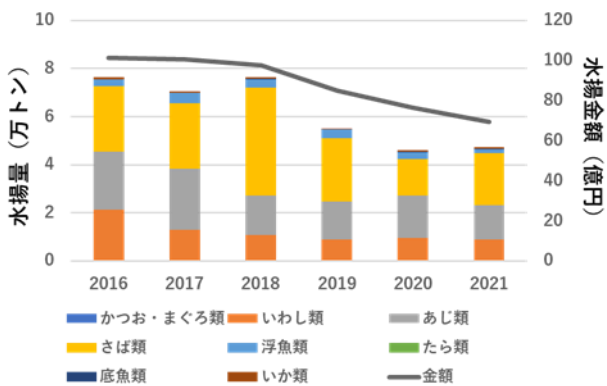


図 9. 松浦港における 2016～2021 年の主要魚種の水揚げ量と水揚げ金額の変化

本年の水揚げ量と水揚げ金額は、いわし類・あじ類・さば類を中心に 10 月末で 4.7 万トン、69.4 億円である（図 9）。2019 年以降、あじ類とさば類の減少により、全体の水揚げ量が 5 万トン前後に低下し、水揚げ金額も減少している。本年の水揚げ量は 10 月末で前年（4.6 万トン）並みに達しており、11 月もさば類の水揚げが好調であることから、年間では 5 万トンを上回ると見込まれる。

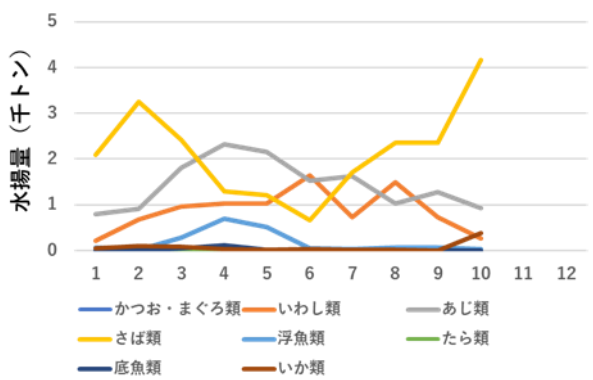


図 10. 2021 年の松浦港における魚種別月別水揚げ量の変化

本年の魚種別月別の水揚げ量をみると、近年と同様に、さば類では秋～冬を中心に、あじ類（マアジ）やいわし類（マイワシ）は春～夏を中心に、それぞれほぼ周年にわたり水揚げされた。また、春には浮魚類（ぶり類）が水揚げされた。さらに、最近ではスルメイカ資源が低迷しているなかで、10 月にややまとまった水揚げがあったことが特徴である。

7. おわりに

最近のわが国周辺における資源状態を反映し、本年は各港ともマイワシやさば類を主体とする水揚げ状況であった。一方で、サンマとスルメイカの著しい不漁が続いており、日本海や東シナ海ではあじ類（マアジ）の減少も目立った。こうしたなかで、年間を通じた水揚げ量は概ね近年あるいは前年並みを維持するものの、水揚げ金額は、相対的に価格が

高いサンマやマアジ、スルメイカの減少、豊漁であったもののカツオの価格の伸び悩みなどにより、最近の減少傾向を脱するには至らないと思われる。コロナ禍からの需給関係の回復を含め、来年の動向を注目していきたい。

また近年は、わが国周辺の海面水温が高めで経過しており、特に今夏の三陸・道東海域と日本海は記録的な高水温であった。これにより、太平洋北部海域におけるマイワシやさば類の分布の北偏傾向と南下時期の遅れが一層顕著に表れ、日本海においてもスルメイカの北上経路の沖合化をもたらした。こうした海水温の変動の背景には地球温暖化の進行があるが、直接的には気温の影響や黒潮大蛇行の継続による黒潮続流からの常磐・三陸海域への暖水の供給、親潮の勢力が弱い一方で対馬暖流の勢力が強いことなどが影響を及ぼしている。今後のわが国周辺の気象や海況の変化にも一層の注目が必要である。

なお、本年の海況や主要魚種の漁況の経過の詳細については「2021（令和 3）年のわが国周辺の漁海況の特徴について」（<https://www.jafic.or.jp/>）をご覧ください。

（会長）